

シーン4

「へえ、ラブホってこうなってるんだ。ほら、入ろ、入ろ」

「……今日のデート楽しかったね。んふっ、キミの今日着てる服、体にピッタリ張り付いて、お腹も脇も太もももバッチリ見えて、とっても似合ってるよ」

「よく似合ってるよね。ドスケベ痴女って感じで。ね、デート中に色んな人に見られてどうだった？」

「すれ違うヒトみんな、キミを見てたよね。ちよつとスカートの裾が上がっただけで見えちゃうぐらいミミなのにさ、何度もショーツの中で勃起して♡」

「履いてるショーツも女の子のヤツだし、れろちゅば、はふ、んふう、んれろお……見られたら大変なことになってたよね」

「結局、キミが我慢できなくて、物陰でオナニーするの許可したけど、近くのヒトに雰囲気と匂いで絶対にバレてるっほいし♡」

「ね、なんとか言ってよ」

「ほら、今もお耳レロレロされて、オチンポぎんぎんだよ♡ それに乳首もおっ立てちゃって。服の上からでもわかつちゃうよ、ほらあ♡」

「んふ、グリグリつて触ったら、今もビクンてお胸震わせて、オス乳首、いやらしく反応しすぎ♡ね、こつち向いて。ミスカから覗いてるエッチなショーツの膨らみ、すゝりすりしてあげる」

「んふっ、ちよつとお尻浮かせて、ハアハアしすぎだつて。すゝりすり、すりり♡ んふ、オチンポフル勃起して、ショーツのクロツちにエッチな染み、できちゃってるよ」

「このまま、ショーツをずらして、あんっ、露出したオスマラあ、扱いてみせてよ」

「その代わり、ボクの自分のふたなりチンポ、んんっ、ほらあ、いっぱいシコシコするから♡」

「んふ、くふう、二人で一緒にシコシコしながら、あつ、ああつ、いっぱい気持ちよくなるっ♡」

「キミのアへつた顔みながら、ん、んんっ、オナっ、気持ちいいっ♡ ふひ、くひんッ♡」

「はあはあ、オチンポ見せあいながら、シコのっ、ふひ、くひん、んいっ、いい、いいのっ♡」

「セックスとは違つて、はあはあ、すっごくいけない感じで、シコシコ、感じるっ、んあ、んああつ♡」

「ね、このまま一緒に射精しよう。ボクの精液、キミにぶっかけるからあ、キミもボクめがけて、発射してえ、んあ、んああつ♡」

「はあはあ、オチンポの中、上がってきてえ、出そうっ……亀頭の敏感なところ、指で輪っか作って、集中的に、シコシコシコ、シコシコシコッ♡」

「ふひ、くひん、もう出るっ……♡ ほらあ、秒読みするからっ、3、2、1、い、

「で、出るっんッ♡ ゼロおゝっ♡♡♡」

「んんんっ、はあはあ、一緒に出ちゃったね♡」

「眷属くんにごかけられながら、あふ、はふう、ボクもごかけできて、うれしい♡」

「これだけでも妖魔に堕ちて、良かったと思うよ♪ じゃ、ショーツを脱いで、四つん這いになって。そのままボクにお尻を向けてよ」

「んふ、そうだよ、ケタモノみたいな格好で、ほらあ、ボクのオチンポ欲しいよね？」

「だったら、おねだりして見せて。アナルに指を添えて、くばあ、だよ♡」

「妖魔に堕ちたメスアナルなら、おまんこみたいに広がるから、思い切り、くばあ、してみせて」

「んふふう、はあゝっ、ピンク色のアナル奥まで見えて、ドスケベにもほどがあるね」

「じゃあ、浅ましくおねだりできたキミのお尻、んんんっ、犯してあげるっ……はあはあ、ほらあ、奥までズブづつ入って、S字結腸に、ボクの力が当たってるの、んんっ、わかる？」

「もっとリラックスしていいよ。四つん這いのままで鏡を向いてアへった顔、ボクに見せてよ、ん、ん、ん」

「このまま、お尻の中、ゆっくり混ぜながら、はあはあ、お耳も舐めてあげるね、んれろ、れろお」

「れろれる、んれろちゅば、ちゅば、ちゅぶ、ちゅばぶっ♡ んふ、くふう、吐息もふゝ、ふゝ、ふう

ゝ♡」

「ペロで、お耳の穴あ、いっばひズボズボしながら、んちゅばちゅ、ちゅぶ、ちゅぼちゅぶ、アナル奥まで、ん、ん、ピストンしていくね♡」

「くふ、んふう、絡みついてくるオスマンコの粘膜う、エッチすぎて、ん、ん、腰振りい、激しくなっ

♡ はあはあ、お尻犯されて、エロい顔しすぎ」

「ほらあ、鏡見て、キミのアへ顔、映ってるから♡ 口元緩んで、涎を垂らして、はあはあしてるよね

♡ んふ、キミってば、いつもそんなメス顔で、喘いでるんだよ」

「恥ずかしいマゾ、丸出しだよね、ん、ん♡ それでお尻ズボズボされるたびに、んんっ、ほらあ、今みたく口開けてえ、あゝを突き出してよがるんだから♡」

「もっと自分のマゾに自覚持ったほうがいいよ。それで、もっと無様に、情けなくアへれ、アへれっ

♡ そらっ、そらそらっ♡」

「このまま鏡見て、いっばいお尻、振りまくっ。出された瞬間の、アへった顔、見せてあげるからっ」

「んんっ、そらそらっ、思い切りアナルかき混ぜて」

「はあはあ、このまま出してあげるね。眷属として、ご主人様のナマ射精っ、しっかり受け止めてよ」

「んんっ、んんん——ッ♡♡♡」

「ほらあ、この顔だから、目を見開いたまま、背すじをそらせながら、だんだん緩んでく表情♡」

「んふう、だらしなく緩ませすぎで、ありえない顔♡ くすすっ、はあはあ、でもボク、この顔、大好

き♡ んんっ、思わず、顔を近づけて、んちゅ、キスしちゃっ♡ んちゅ、ちゅばちゅ、ちゅぶっ♡」

「肩越しにディープキスしながら、んれろれる、れろちゅぶ、お尻い、ねちつくズボズボしてあげる♡」

「あふ、はふう……まだあ、これからだから♡ 今度はボクが仰向けになるから、んんっ、ボクのそり立ったオチンポに上から跨って。」

「うん、そうだよ。さっきみたいにアナルをくばあして、そのまま腰をゆくりと落として♡」

「痴女みたいな女の子の洋服着てえ♡ 幼馴染のフタナリちんぽにだらしない顔でガニ股の恥ずかしい格好でまたがってるの♡ キミらしくていいね」

「ん、んん、ボクのオチンポ全部、アナルまで咥えこんで、はあはあ、エロすぎ♡」

「このまま腰を突き上げて、ん、んん、キミのケツ穴っ、混ぜ捏ねがらあ、感じさせてあげる、そら、そらそらっ♡」

「あれえ、どうしたの？ 体動かしながら、自分で乳首いじっちゃってるんだ、くふふう♡ 乳首ゴリゴリしないと、気持ちよくなれないなんて……はあっ、どこまでマゾ男(お)なの、キミってば」

「しかも、ガチガチにそり返ったチンポ先から、だらだらザーメン、溢れさせちゃってるね♡」

「これ、先走り液つて量じゃないし、まさか、前立腺ゴリゴリされて、くすっ、ところてん射精つて言うヤツ♡」

「もう、聞いているの？」

「射精で蕩け切った顔して、うわの空なの？ 別にいいけど、このまま、んんっ、キミにまた出したいから、もっと動いて。ボクにキミのいやらしいスクワット見せてよ」

「限界まで腰振って、跨ったままドスケベダンスして……眷属なら、ご主人様の命令、聞けるよね♡」

「はあはあ、キミの浅ましいロデオで、ボクを気持ち良くしながらなら、乳首オナも続けていいよ」

「ん、んんっ、そうだよ。きゅっと締まったオスまん♡ いい、いいよ、たまらないっ♡」

「キミを眷属にできてよかったよ」

「自分で乳首いじりしながら、腰をいっぱい振ってるドスケベなマゾ姿見てるんだからね♡」

「ほらあ、もっとしっかり腰振って♡ 勃起したオチンポ振り乱しながら、いやらしく動いて」

「デートで人間達にいっぱい見られていつもより興奮しちゃってるのかな？」

「おちんぽをこ振り回してとっても可愛いよ♡ んう、んううっ、それじゃあ欲しがりの眷属くんのおしりにい♡ たっぷり出してあげる♡」

「騎乗位でアナル、ぐちゅ混ぜにされて勃起したクリチンポぶるぶる震わせながら、ほらほらあ、イケっ♡ イケイケっ♡ メスみたいに連続でアクメっちゃえっ♡」

「ナマで出されて、メスイキしちゃええ——っ♡♡♡♡」

「んはああああ、マゾ眷属の尻穴にナマ種付けえ、くふ、んふう、気持ちよすぎ……あふあ、んふあ……んん、んんんっ、ボクがキミに出すたびに、そそり立ったオチンポ、ビクつかせて、先走り汁撒き散らさないでよ」

「んふふ、背すじのけぞらせながら、全身震わせて、キミってば、完全にイっちゃってるね」

「射精せずに、お尻でアクメつちゃうなんて、それ完全にメスイキってヤツだね、くふふふっ」

「ああ、ダメ。せーしに濡れてグチョグチョになって服きて♡ おしりからびゅっびゅせーし溢れてるの見てるとまたムラムラしてきちゃった」

「全部、キミのせいだから。責任取ってもらうよ」

「ボクが起き上がるから、今度はキミのほうが仰向けに寝て。けど普通に犯すんじゃないし、太ももをM字に割り開いて、ケツ穴を上にならけだして——」

「うん、いいね。」

「マゾ眷属くんにはちんぐり返しが最高に似合うねっ」

「んう、んううっ、このままガバガバに拡がったキミのアナル、上からいっぱいかき回して、ん、ん、あげるよっ♡」

「はあはあ、使うほどにほぐれてキミのお尻、セックスのためだけのマゾ穴みたい」

「ほらあ、奥まで突いて、内臓まで響くピストンっ、いっぱいしてあげるねっ♡」

「もういつて、わけわからなくなってるね、キミ。いいよ、キミのお尻まんこ、オナホつかいして」

「ん、ん、ボクだけ勝手に気持ちよくなるよ。マゾのことなんて気遣わなくていいよね」

「どうせ、ボクの性処理のためだけに眷属に変えたんだし。あはっ、これだけバカにされても、よがりまくって、またイこうしてる、くふふっ」

「けど、もう今日は十分イったよね？」

「最後はマゾ便器らしく、ボクだけを気持ちよくしてよ♡ そうそう、今日のデートの時も街のあちこちに異界領域を広げてといたからそれが育て街を覆うのも時間の問題かな♡」

「はあ、はあっ、最後の仕上げはボクらの学校だけ♡」

「同級生も先生も、みくん、ボクらのドスケベなオモチャに変えちゃおうよ」

「ん、ん、みんな、ボクらの性処理のためにだけ存在するんだよ。素晴らしいことだね、あふ、はふっ♡ そのことを想像しただけで高ぶってる、んあ、んああっ♡」

「もう、イクうッ、イっちゃいそうっ…♡ はあはあ、出る、出るうっ♡ んんんっ♡」

「はあ、はあっ…今度は、キミのお口に♡馳走してあげる♡ あはは、犬みたいに舌出しておねだり♡ ほんとうにいい♡」

「んあ、んああ♡ んあはああああ——っ♡♡♡」

「はあ、はあ…んっ♡…全部出し切っちゃった♡」

「ん、んっ、はあはあ……そうそう、ちんぽの奥に残った精子もきちんと吸い取って♡精子でべちよべちよになって気持ちよさそうな顔♡」

「またデートしようね♡今度はもつとエッチな衣装で♡あー、それとも清楚なワンピースがいい？ふたりともノーパンのおそろいで♡」

「あー、また勃起して♡堪え性のない眷属くんだ。いいよ、夜が明けるまでいっぱいかわいがってあげる。」